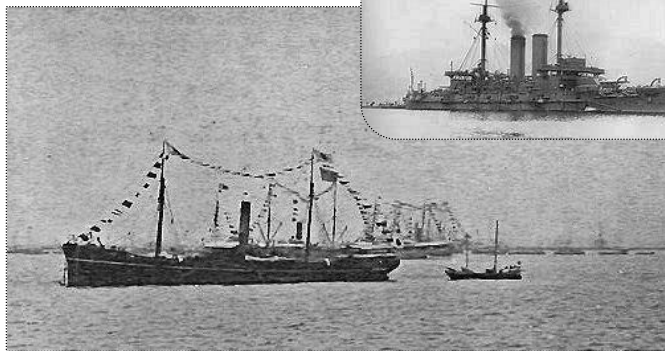




進修同窓会 HP にアクセス



日露戦争時に連合艦隊旗艦であった戦艦「三笠」(上)
1905 [明治 38] 年 10 月 23 日 連合艦隊観艦式 (下)

土浦中学校の修学旅行 1

土浦中学校の修学旅行は、開校2年目の1898 [明治 31] 年の春から始められました。途中、実施されなかった年もありますが、1942 [昭和 17] 年まで続けられ、土中生たちが一日千秋の思いで待ち望む学校行事となっていました。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。【 】は筆者による注記です。

なお、中1回生の修学旅行は本紙第155号で、3回生と8・9回生の霞ヶ浦周回旅行は第157号で紹介しています。

旅行の手配

中2回生の3年次、1901¹⁹⁰⁰ [明治 33] 年の日光への修学旅行は、1901¹⁹⁰⁰ 年7月発行『進修第3号』修学旅行記 日光方面の記 (3年山口鼎太郎・飯竹彦三郎) によれば、次の行程で実施されました。

- 10/14 (…徒歩) 立田 藤沢…小田…北条…上大島 (昼食)…下館 (泊) 堺屋・新巴
- 10/15 下館…関本上 (鬼怒川・中の渡し渡船) 中…小金井・国分寺…小金井駅 宇都宮駅…二荒山神社…栃木師範学校…旧城跡…宇都宮駅 1500 1610 日光駅 (泊) 神山・小林ホテル
- 10/16 日光…輪王寺…東照宮…霧降の滝…日光…ホテル
- 10/17 日光…裏見の滝…馬返し…中禅寺湖…日光駅 1700 宇都宮駅 小山駅 (泊) 角屋・田中屋
- 10/18 小山 (0500) 結城…中 (鬼怒川・中の渡し渡船) 関本上…下妻 (泊) 常総俱樂部
- 10/19 下妻…立田

宿は一応事前に予約していたとしても、宿泊料金の交渉や部屋割りなどは、当日、本隊に先立って宿泊地に赴いた担当 (先発) の先生が行っていました。この旅行で、先発を務めた石川重房先生 (国語) が、『進修第3号』「旅のすさび」に、その状況を次のように記しています。「……。10月14日、土浦を出発し」やがて下館も見ゆるに、時計は未だ十時半なり。搦飯【かれいひ 握り飯】をもたれば、いかに午後にして旅館には着かんとて、いふせき【いぶせき むさくるし】店に入りて、酒などあつらへて呑みつゝ、搦飯を食ふ。雨は雨衣を徹して全身濡れそぼちたるも、酒の余徳にて湯気の立ち昇るは、不動尊とや人見るらんかし。久しく古い古ひ【憩い】て、十二時を待ちて下館に入り、堺屋に着く。新巴と組み受て受け負ひたり

と云へは、間割【部屋割り】など終へて新巴に赴く。此処は仕出し屋を兼ねたれば、美姫も見え、鮎の尺はかりなるか焼きて弁慶【串刺しにして焼いた魚などを刺す。藁を束ねたもの】にさしたるもあり。是にて一酌と思へど心に任せず。生徒の室は二階にて八畳三間に六畳一間にて、凡て【すべて】打ち通【ぬ】きなりといへば、別に間割の要なくて、他に職員室一間を取りて帰りぬ。……。翌十七日は本隊は中禅寺湖に詣つるなり。我は度々になりぬれば、めつらしからん方々に見せたまつらばやとて、先発となりぬ。……。さて本隊に別れて、途にて物など買ひて、停車場に往きたるに、今汽車かいつれ【出づれば早く札を買ひねと云ふ。小山迄何程かと問へば六十一銭なりといふ。……。】「小山の宿」角屋に至りて宿料の事など定め、間割など割付け、隣の田中屋か一半を引受けたりと云へは、そ古に行きて見るに八畳四間打ち通きなれば、別に間割の必用【必要】もなく、教員室丈を取りて、角屋に帰れば早正午なれば、一杯催して搦飯を終り、……。」

旅が始まると、行列から先行する形で宿割りを担当する家臣らが宿場に赴き、準備をさせていたのです。
(注) 大人数
参考交代の人数は石高によって定められていた。例えば、10万石の大名であれば、騎馬武者10騎、足軽80名、中間従者140〜150名ほど。加賀百万石と称された加賀藩の場合では、全体で2500〜3000名、多い時で4000名に達したといわれている。
旅の趣き
土中生たちは、旅館の無い所では、寺や神社に泊まっていますが、そこでも簡単な食事だけは用意してくれました。1898年5月、最初の修学旅行で宿とした江戸崎の龍承寺では、「……。夕飯のときとなりぬ。膳などもよりあるべきはずもなし。一包の握飯一碗の味噌汁これを珍味とする。……。」(『進修第1号』(1900)年1月発行「修学旅行記」2年根本亀一郎) といった様子でしたが、それでも、「……。八時半は消灯の時間なり。雨なを【なほ尚・猶】やまず、はじめて聞くなる読経の声、木魚の音。夜ふくる迄夢覚まさぬはこれも旅寝の一興ぞかし。……。」(「修学旅行記」と、待遇の悪さを気にかける様子もありません。家庭での食事も一汁一菜が当たり前でしたから、食事もそれほど粗末だとは思わなかったのでしょう。「……。また『鹿島灘』の海岸に出でしに、山の如き大波の打ち砕くる様、白玉の如く白雪の如く、其面白さ筆に尽しがたし。大波にのこされし、いと奇【めづら】しき貝殻をなし、山住に馴れし吾等の目には、こよなく珍しければ、美しきもの四つ五つ、拾ひ取りて【宿に】帰れば、……。」(『進修第1号』「秋期修学旅行を記す」1年小井戸浅二こと、見るもの聞くもの、全てが物珍しかったようです。しかし、5日間も親元を離れた、行軍続きの旅は、中学1・2年生にはかなりきついものとなりました。そのため、我が家に帰り着くとほっとした気分になつたようで、小井戸は、その旅行記を「……。土浦に入り、列を解きて家に帰

れば、家の子ども打喜びて出迎へ、弟の水汲み来りて、足洗へよと云ふも喜し【嬉し】。足打ち洗ひて、座敷に上れば、心もゆるやかに思はれ、蘇生の思ひありき。先づ衣をきかへ、座敷の上にて、弟と妹とに途中の話など、問はれつ、語りつ、拾ひ取りし貝殻や、松を出して示せば、こは珍らしと打喜びて、よくこそ持ち来れるなど云はるゝも嬉し。……。」(「秋期修学旅行を記す」)

1905「明治38」年10月23日 連合艦隊観艦式

土浦中学校の修学旅行は、1900年から1年1回となり、行き先は概ね、1年生は県北の水戸・大洗・常陸太田、2年生は鹿島・香取・成田・佐倉・銚子、3年生は日光、4年生は横須賀・鎌倉、5年生は仙台・松島方面となっています。

横須賀では、海軍鎮守府・海軍工廠・造船所・海軍機関学校などを訪れるとともに、軍艦への乗船見学もしています。(1908年には、世界一周航海の途上、寄港中であったアメリカ大西洋艦隊旗艦・戦艦「コネチカット」にも乗船しています。)

1904年には、日露戦争のために実施されませんでした。翌1905年9月5日のポーツマス条約調印により日露戦争が終ると、早速、修学旅行も復活し、10月19日から4泊の予定で、3・4・5年生は合同で、東京・湘南方面に足を延ばしました(1・2年生は、鹿島・銚子・佐原・成田方面)。19日東京、20日鎌倉、21日横須賀と巡ってきた一行は、22日の12時半には横浜吉田町中村屋旅館に到着しました。すると、「午後九時半迄自由散歩を許す。」更に、「明日の帰校を延期して明日は川崎附近にて観艦式を拝観して後、東京に一泊すべし。」(「進修第7号」)

学旅行記」記事係5年山口松男・中5回、4年藤井源之助、3年松浦憲重郎との命令が下りました。23日には、帰還した連合艦隊の観艦式が予定されていたのです。生徒たちは、「……。快なれや、あゝこの楽しい旅行は一日を延ばして、快極まる晴れの観艦式を見らるゝ事かと思へば、嬉しさに堪へられず、飛んで廻りたき程也。……。」(「修学旅行記」と、喜びに溢れ、思い思いに市内見学に出掛けました。その日、横浜では各戸に連合艦隊司令官東郷平八郎海軍大将歓迎の国旗が掲げられ、観艦式見物の人や大将出迎えの人々でごった返っていました。生徒たちは、15時40分に横浜駅に到着した東郷大将を出迎え、「……。英姿堂々たるその温顔よ、吾人が世界の偉人として畏仰して措かざりしところの東郷大将の顔容に接したる吾人の満足は、何を以てか之に代へむ。英姿は次第に遠く、其影の見えずなるまで、吾人は無限の感に打たれて万歳を連呼したりき。……。」(「修学旅行記」と、感激に浸りました。



東郷元帥の書「質実剛健」

東郷元帥の書「質実剛健」(左、本校所蔵) 東郷元帥 (右)

外出許可は21時半まででしたが、生徒たちの多くは長旅の疲れか、明日の早立ちのためか、20時頃から床に就こうとしていました。なお、中村屋旅館の待遇は、「……。さて、中村屋の事につきては一言し置かざるべからずといふ次第は、中村館はやつとの事にて見当りし旅屋也。明二十三日の観艦式のため宿泊するもの夥【おびただ】しく到底旅館には泊され

まじ。野宿は覚悟の上とて来りしその案外に、先発川澄【宗二郎 書記・社会在職1905年】「昭和4」年【教師の非常なる尽力によりて、頗る窮屈ながらもこゝに宿るを得しは、実に幸いなりし也。外の旅館は一の空室もなき迄になりたるより察すれば、百五十の一行が一旅館に泊する事を得たるは実に川澄教師の勞多きに依るを思へ、一行は幾多の感謝を川澄教師に払うべきものあり。さてその窮屈なりといふは十二畳の座敷に、五年級四年級凡そ八十名が外套のまゝにて、頭と足と突き合せて、ツとの事にて一睡したるを以て知るべき、……。」と、いうような凄まじいものでしたが、生徒たちは、「……。またこれ一種の詩味を感ぜずや、……。」(「修学旅行記」と、半ば達観の境地に達しています。

翌23日は、大騒ぎのうちに3時半起床、寝ぼけ眼で4時半に朝食を済ませ、あわただしく横浜駅へ。潮のことき人波に捲かれつ、押されつ、まるで狂気の如くに、改札口より、走り出て、辛くも列車に乗り込み、6時10分に川崎駅着。駅から整然と行軍をして、6時35分には海岸の堤防の上に到着。設けられていた芝生の席に座を占めると、そこから100余艘の大小の艦艦もどろろ、軍艦、厳然として浮かび、満艦飾を施して、威風堂々、海を圧したる戦勝艦隊が見渡せ、「絶世の壯観なり。」との言葉以外に形容の仕様がありません。10時10分、観艦式が始まりました。「……。この時遙かに、一発の号砲、爆然大空に響き渡るや、百余の艦船、これに応じて礼砲を発射し、轟々として天空を押し、天柱砕け、地軸破れんとするばかり。砲烟は濛々として海上に漲り、艦体為めに隠れ、隠現鬼没たり。あゝこの盛観よ、世界有史以来の日本海の大戦もかくありしかと疑はるゝ許りなし。皆快哉を叫び、喜悅満面に溢れ、底止【やむ】と。終りまで行き着いて止まる」とする所

を知らざるものゝ如し。……。」(「修学旅行記」と、歴史的光景を目撃した喜びに浸っています。が、艦隊は横浜沖に並んで停泊しているだけで、艦隊運動をする様子はありません。朝から4時間も眺めていれば、さすがの生徒たちも飽きてきます。

10時半には先生方より、「随意東京に赴くを許す。」との指示があり、殆どの生徒たちは、東京を目指して出発しました。船体を飾る夜のイルミネーションを見ようと残ったのは、石田悟雄【英語在職1900年】(1905年12月)、名越時孝【国語 在職1908年】、中山庄一郎【中1回 国語 在職1903年】(1908年)の3先生と5年生の市村・廣瀬・皆川・額賀などのほか数名に過ぎませんでした。

生徒たちは、東京へ向かいましたが、川崎駅は大混雑、列車は超満員、やむなく品川まで歩いた者もいました。4・5年生は本郷湯島の今田屋旅館、3年生は外神田の大黒屋に宿泊し、4・5年生は23時まで、3年生は22時までの外出が許可され、疲労困憊でしたが、旅は今夜限り、凱旋に沸き立つ都の盛況を見ないのは愚の骨頂と各自思い思いに夜の東京に繰り出したのです。

翌24日は、当初の予定にはない日でしたので、「午後3時迄自由行動を許す。3時には上野停車場に集合すべし。」との命令が出され、今日を限り各自勝手、気ままな行動を採りましたが、記事係は、上野公園で開かれた東郷大将の歓迎会に出向き、その記事で「修学旅行記」を結んでいます。

その後の修学旅行は、明治40年代に入ると、1年生県北、2年生東京、3年生鎌倉・横須賀、4年生日光、5年生箱根のコースが採られるようになり、大正3年頃まで続きました。